

## 『人工生命』ほぼ完成」の報道に接して

最近の新聞で「『人工生命』ほぼ完成～ゲノム合成し細菌作る～米の研究所」や「動き出した『人工生命』 『命とは何か』の問いかけ」等の見出し記事が目にとまった人は多いと思う。

「細胞膜などは別の細菌のものを借りているので完全な人工生命とは云えないが、この細菌のゲノムを科学合成したものを別種の細菌の細胞膜を器にして移植したところ、この細菌の自己増殖が確認できた」とのこと。

つまり、生物と無生物の違いの条件の一つとして「生物は自己増殖できること」と云われていたが、人工的に自己増殖する生物を作ることに関わる研究だけに、注目されるものと思う。

「ゲノム」とは、各生物の四種の塩基（アデニン A）、グアニン G）、シトシン（C）、チミン（T））の結合・配列状態である全遺伝情報のその生物の設計図のことであり、それ故、今回の研究は、細菌であってもそのゲノム（生命）を人工的に作ったということになる。

この研究技術を応用して人工細菌に欲しい物質を作らせるなど、遺伝情報を自由にデザインできることも可能となり、遺伝性の難病等への治療への道も拓くものと期待される。

一方で、この人工細菌技術がテロでの生物兵器の悪用されないとは言い切れない危険性を持つとも云える。

科学技術は驚異的に日進月歩しているだけに、この研究が人工生命への更なる道を拓くことは確かなように思う。

今回の研究は人工生命を作るというものだけに、記事の見出しにあるように「命とは何か」を我々人類に問いかけてくるが、自然の摂理である生命誕生現象まで科学技術（ゲノム操作）は踏み込んでいいのだろうか、また、人類はそこまでの科学技術が進歩する時代を望んでいるのだろうか、つい考えてしまう。

人類に多大な福音をもたらす研究の先駆けとは思いますが、他の国でも実施・検証・確認し得るものが科学技術というものだけに、応用への危惧が多いので、研究の進歩と同時に、いやそれ以上に、応用研究の枠組みや応用の管理をどうするのか、国際的に議論、検討を進めることを強く求めたい。